

保護者に渡し、この新しいシステムに対する
評価の資料としたが、

回答数 七五の中

可とするもの七一

否とするもの四

で、約九五%が、この方法を支持している
ことがわかった。

保護者の述べた支持理由をのせる紙数がな
いのは、残念であるが、私たちは、保護者の
強い支持や、児童たちの喜びに満ちた学校生
活に強い確信を得て、さらにこの研究を進め
たいと思っている。

さいごに、この方法では、

1、担任教師の調和(教科、性格等)が得ら
れないと問題が残る。

2、一人の教師が百人もの児童や保護者の指
導に当らねばならなくなるので、肉体的に
も、時間的にも、そうとう負担になる。

3、担任教師の一方が変ったとき(転任等)
新任の教師に対して児童や保護者がどのよ
うな態度をとるか(一方に残った担任がい
るので、どうしてもその方との結びつきが
深くなるだろうと思われる)問題があり、
その面から協力担任制にひびが入らないか

心配である。

等々問題があるが、それらについては、また
別の機会に述べることにする。

(お茶の水大小学校)

自由保育を実施して

(組解体保育)

井上 季子

一、自由保育を実施するまで

「自由保育か一斉保育か」という問題につ
いては、昭和二十七年度文部省主催近畿研究
集会において、学習指導の改善に関連して取
上げられた。近畿地区の出席者から、それぞ
れの意見が続出し、理論的なそとわくだけは
つかみ得たのであるが、これを各地の幼稚園
において、実践してみることが一つの課題と
して残されたのである。当時我が大阪市にお
いては、すでに市立貫江田幼稚園が新しい試

みとして、自由保育の研究に乗り出し種々のデ
ーターを出していられた。そこで私はこれを
一つの資料として研究集会に自由保育を提唱
してきたのである。

自由保育と一口にいつても、園の施設、設
備、職員組織、幼児数、等により、その方法
はいろいろである。自由保育形態のサンプ
ルを出すことはきわめて困難であり、またそ
うすることは保育をわざわざいさせる危険性が
多い。大阪市は研究集会の直後保育形態の問
題について度々研究集会をもった。そして長
所短所を各園の状況とにらみ合せて討議し、
教育目標に合致した保育活動を展開してい
くように、努力したのである。

大阪市では貫江田幼稚園の他に、二、三の
幼稚園が此の形態を取り入れ、多角度からそ
の良否を研究してきたのである。多くの園は
これを良しとしつつ、尙此の形態を取り得な
い現状である。そこで前進への手段として自
由保育の長所を織りこんだ一斉保育を試みて
いる。

自由保育は理論的に考察して良いという事
を二十九年度の保育学会において貫江田幼稚
園長を始め、各方面の権威者のひとしく推奨

されたにもかかわらず、なお一斉保育を捨てきれずにいることはどうしてであろう。大阪市では二十九年七月再び全市幼稚園研究会で此の問題を取り上げ精細に其の難点を分析したのである。以下それをあげてみると、

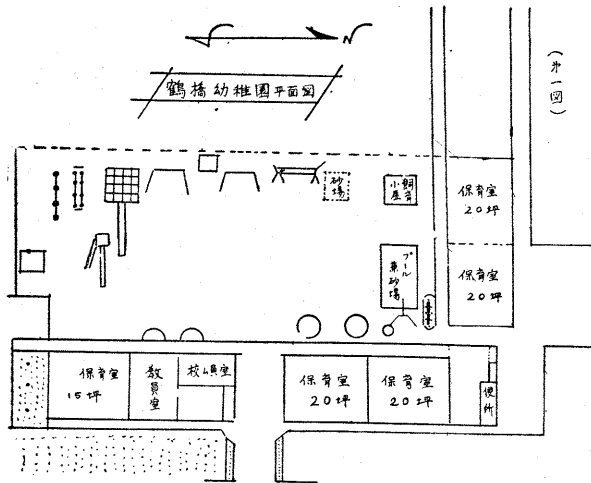
- 1、幼児と教師との心のふれ合いが少ない。
- 2、人数が多いと、幼児の個に即した指導に理解がともなわれないことがある。
- 3、保育の指導と記録の両立が困難である。
- 4、単元の展開がスムーズにゆきにくい。
- 5、幼児の生活に片寄りができるように思われる。
- 6、集団生活に必要な種々の躰ができていない。

これに対して実践園においては5、6は記録の上に、又幼児との生活の上に其の心配はない。との確答があり、自由保育の長所をあげて、一斉保育をしている所こそ、行動記録がとられていない現状を指摘された。

本園は自由保育形態を何等かの形で実践してみたいと念願してきた。又近畿研究会でこれを提唱してきた責任もあるので、色々研

究したが左の難点にぶつかった。

- 1、教師間の円滑なチームワークが絶対に必要である。
- 2、せめて一室でも余分の部屋がほしい。
- 3、全教師が自由保育の必要性を熟知し、これに対する積極的な意欲と、これを効果的に展開する技能が必要である。



こうしてためらうこと二年、本誌第五十三巻第九号に掲載された保育学会における一斉保育と自由保育のシンポジウム の要旨を讀んだ。そのなかに守屋光雄先生が「自由保育を行うためには、あらゆる困難を打破し、且改善してやらねば幼児保育の重任が果せないという旺盛な意欲こそ必要である」と指示していらつしやることにより、勇を鼓して二十九年十月より実施にかかった。以下八週間約二ヶ月間にわたつて行った自由保育の概略を記してみる。

二、自由保育の実施

1、本園の施設設備(第一図)

木造一階、保育室五室、内二室は獨立てを取り広くできる(四〇坪)
余分の部屋はないが自由保育の環境としてはよい方である。

2、組織

園児、二百二十三名、五組、全部一年保育児職員、補助職員を併せて六名 校務員、二名

3、実施までの準備

A、自由保育実施園の參觀

週案

	月	年	月	日	
	月	年	月	日	月
	火				
		週日標			
	水				
		週評價			
	木				
	金				
	土				
		月評			

(第二回) 日案

第	月	日	曜	日	時
2	1	12	11	10	9
					予行準備 活動
					指導者の観覧 指導
					反省

B、研究会を数回持ち、左のことを定める
 a、単元は前半を運動会、後半を秋の野山とする。

b、保育案の形式は独自のものを作る(第二回)

c、記録については、家庭に連絡し、幼児

音(絵)			音(絵)			音(絵)			音(絵)			音(絵)		
氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名

(第三回)

のエプロンの襟に紐と名前をかいいて縫つける。記録簿は半紙一枚を用い、全園児一日の動きをパート別に一枚のものに記入する、九時半、十時、十時半と自分の受

持つパートにきた幼児の遊びを記入、午
 后組別に分け担任に渡す(第三回)
 d、パートは二つにわたる。

○音楽リズム体育あそび
 音楽リズムの他にブランコ、雲梯、シー
 ソー、ジャングルジム、滑り台、攀登棒
 其の他の競技、球技、又はそれに類する
 体育的な遊び。

○絵画製作構成あそび
 絵画製作の他に積木、ままごこと、砂場、
 等幼児の構成意欲を満足させる遊び一切

○職員は一パート三名つつ、各自の研究に
 全致して定める。内二名は指導、一名は
 記録。

○記録は一週間の輪番制とする
 e、保育室

余分の保育室がなかったため、食事の部
 屋の必要上、全部の机、椅子を二部屋に
 入れる。他の二室は広い部屋とし午後の
 保育、雨天の保育、其の他庭に持ち出せ
 ない絵画製作、ピアノ使用の音楽リズム
 指導のための部屋にあてる。残り一室は
 各組の遊具全部を入れ、玩具の部屋とす
 る。

時	9	30	10	30	11	30	12	30	1	30	2		
	登園視診	興味中心の自由保育	この時間に意図する单元をもる	後かたづけ	休息	レコード鑑賞	清潔しらべ	昼食	静かな自由あそび	お話	紙芝居	劇あそび	ことばあそび
										今日の話	反省	明日の計画	
										帰	宅		

(第四図)

f、一日のカリキュラムは大要第四図の通りにする。

幼児帰宅後、毎日の保育の反省と、明日の打合せをし、記録の整理をする。

以上細部にわたり協議し、なお指導者の意見をきいてできるだけ無理なく自由保育を行いたいと念願した。

4、実施状況

職員は始業三十分前より保育の場を構成する。幼児は登園すると構成された場、或は自己が遊具を持ち出して、構成した場で自由に

活動を始める。全幼児の旺盛な活動が展開される九時半より記録者は自分のパートに属する遊びの場をたどり幼児の行動を記録する。これは大体半時間で一巡し、十時、十時半、と三回幼児の動きをとらえる。幼児の活動は秋の最も気候のよい時であり、其の殆どが屋外で行われ、広い部屋で用意された遊びには参加する子が少なかった。十一時になるとレコードにより後片付けをする。全員片付けがすめば好きな場を選んで休息をしつつ、レコード鑑賞をする(約十分)。此の後マイクを通して其の日のうたのおばさん(テープレコーダーによる)をきいたり、一緒に歌を唱ったり、又集会をして自然、社会事象の話合いをする。清潔調べも大体此の時に行う。昼食は全園児が二部屋に分れて行う。人数が多く稍混雑をするが、仲良しの友達と、又いつも一緒にでない先生と食事をするのは非常に楽しいものらしい。食後から〇時半、或は一時頃まで静かな遊び、其の後帰宅までは二つのパートに含まれないことばあそびを中心に言語表現の面を多くとり入れた、たのしい一刻

がもたれる。一時半から今日の遊びの反省と各パートの責任者による明日の遊びの計画が幼児との話し合いにより定められる。但し半日保育の場合は休息の時の時から広い部屋に入り、明日の話し合いをして帰宅する。以上本園の自由保育の概略をのべたのであるが、八週間を通して組別扱いをしたのは園外保育の時だけで、他は終始組を解いて興味中心のグループ保育を行った。

三、自由保育を実施して

長い間の懸案であった自由保育は終わった。担任は組に帰ってきた幼児を一人一人胸の中へだぎしめてほおずりしてやりたいような気持ちになった。此の時一番大きい問題として残されている「自由保育は是か否か」の反省会を指導者二人を招いて開いた。反省記録は常に自由保育を評価しつつ、幼児の活動の変化と教師の配慮のあり方を批判して記入してきた。これをつづり合せると反省録となるが、それを理論に照し根本的な解明を与えるために重要な点を拾い出してみる。

長所

①自主自立的になる

上から与えるものが何もない。唯場の環境が幼児に働きかけるだけである。教師は誘導するが強制しないからその抑圧から開放され、自然に自主自立的になる。即ち身近なものに何等かの遊びを見つけて工夫創造し、自主自立的の態度が生れる。

②遊びのグループの人数が多くなり意図的に計画的に、又相互の協定により、遊びが継続性を持って発展してゆくようになった。

③交友関係が円滑になり、社会的領域が広がる。これは組に帰ってからもよく交流して遊びや作業を行うことよってしられる。

④社会的要求とか、環境に対する適応性が養われる。場の設定が変化をもち、又自由にいろいろの場に参加し得るからである。

⑤戸外保育を主としたため、身体が発育が著しい。欠席者の少ないこと、発育調査がこれを証明している。

⑥幼児は自己の目標の選択ができるようになった。自由な伸々とした世界を感じるようになった。

短所

①遊びがかたよる

記録が証明する

②計画された保育の指導に時間の殆んどが費やされるので一人一人と心のふれ合いがな
く個に即した指導ができにくい

③単元を展開すべき環境や材料をととのえても、パートにくる子が次々とかわるので、作品としての盛り上り、知的な技術面の積み重ね、単元の継続的な展開は非常に困難になってくる。

④一番表現活動の旺盛なこの時期にいろいろの表現活動に参加せず自己の興味のままの遊具に終始していたのでは、幼稚園教育の目的にも反することになり、幼児一人一人の経験領域のギャップが非常に大きいものとなる。

⑤疲れを自覚しない。
従って好ましくない行動がおこる。

以上大まかなものだけをあげたのであるが、これに従属する小問題は多数にある。これ等は研究会並に保育学会において掲げられたものとほぼ一致する。しかし本園としては更に深く研究することにより、解決する問題ではなかるうかと思っている。短所の一つ一つについて得た指導者の解明と、改善すべき点

並びに次年度に処する計画を、ここにあげて

みる。短所の①②③④については、幼児は前日に話し合ったことをすべて翌日まで覚えておくことは無理である。これを強制することは自由保育の精神に反する。幼児の好む安易な遊びも教師の指導により、製作構成面に、又芸術的に発展してゆく可能性がある。故に単元にもっとダイナミックなものを選び、自由保育の時期を変えようと思われた。むりに個々の動きを結びつけ、一つのまとまったものにもっていく必要がないように思われる。本園としては遊戯室がないので広い部屋を作るため、食事の部屋に全部机を移した。そのため必然的に終日自由保育になりこの保育の欠点を補う組に分れた静かな時間をもつことができなかった。来年度再び此の保育を行う時は、半日保育の食事の机を必要としな
い時期を選びたい。そして朝の時間を自由保育と一斉保育にわけ、この間に休息の時間をとり⑤の欠点を避ける。自由保育ではできるだけ戸外で構成的な遊びができるようにし、種々の材料的な区分によるパートに分れて遊べるように工夫する。一斉保育には幼児に興味をおこさせる必要のある音楽リズム、又は

言語表現を取り入れる。時期は半日保育の時期を選ぶとともに、一年保育の表現活動の最も旺盛な時期を避け、量的な拡がりが必要とする一学期の終りから二学期にかけて（夏休みをはずし、プール遊びを含めて）行うのが良いのではないかと考えられた。パートの分け方も、幼児の多岐な生活を二つに大きくわけ、これに集中させようとしたことに無理があった。職員数の関係もあるが更に工夫する必要がある。

結論として八週間にわたる自由保育の収穫は非常に大きいものであったが、一年間を通じてこれに終始することは危険であるように感じられる。幼児が園に慣れ一応集団生活が出来るようになった時に、これを行い、自主自立の習慣をつけさせたい。そして全幼児が積極的に遊べるようになった時に、継続的な生活活動がどの幼児にも展開できるように、保育形態に変化をつけて幼児の質的な充実をはかるべきである。記録の方法も随分研究して行ったつもりであるが、断片的な記録に終り、幼児の生きた姿をとらえることができなかった。記録も間隔を縮め、自由保育の記録と組保育の個人的なふれあいによって得た記

録を併せて、血の通ったものにしたいたいと思う。

「一斉保育と、自由保育」といってもその園の僅かな環境の相違が大きくこの成果を左右する。これを実施するに当っては、自分の状況を精細に検討し、それに合った方法をよく研究すること。緻密な計画と周到な準備をもってかかること。などを充分研究してからでないとい良い成果を得ることはむづかしい。

いと痛感した。こうして考えてみると、いかにも自由保育は教師側にとってはむづかしいことである。しかし、幼児の側に立つて考えるときは、たとえ生活にかたよりがあるとしても、楽しい幸福な生活の連続であることは間違いない事実である。そこで私も全職員は、本年度のより効果的な自由保育にそなえて、更により研究をしたいと意気込んでいます。
(大阪市立鶴橋幼稚園)

倉橋惣三氏著

『子供讃歌』をすゝめる

此の度、倉橋惣三氏の子供讃歌がフレーベル館より出版されましたことは、我が国保育界にとつて、まことによるこばしいこととあります。

此の書物は、氏が四十数年に亘って歩まれた保育精進の道より湧き出でた珠玉であります。

上梓に当り、保育関係者は勿論、特に広く一般の方々にも読まれることを希望し、おすすめ致します。

日本幼稚園協会